

1. 山口氏の哲学的問い「我々の意識の棲む世界とは、哲学的にどのようなものなのだろうか」について。意識は分別の世界を生き、自分自身についても分別された意識しか知らない。そうした意識そのものが棲んでいる世界は無分別の世界であると言えるが、こうした分別無分別というのも分別である。こうした世界に我々は決して出会うことなくその中にすでに生きている。西田が晩年に好んで用いた大燈国師の言葉に「億劫相別れて須臾も離れず、尽日相對して刹那も對せず」という言葉がある。我々の意識が棲む世界とはこのようなものであり、自己も他者も時もそうである。

2. テキスト

「九 意志の根柢に於ける無限の可能性。自由の因果。思惟に於ける時の潜在性」74 頁 3 行目から最後まで。

3. テキスト要約

内的知覚とその反省を意志の自覚の立場から説明した後、西田はいよいよ「意志自由の立場」の説明に踏み込む。まず「實在」ないし「現実」が「内的知覚」によって与えられる。しかしその背後に「無限に可能なもの」が含まれている、とされる。A という現実には A でないもののすべての否定を含んでおり、その背後には「無限の可能なもの」が含まれているのである。そこで「我々は此立場に於いて、實在界を離れて無限に可能なものを考え得るのみならず、實在界を否定することもできる」とされる。ここではなお「考え得る (denkbar)」という立場に止まっている。さらに「實在界」および「無限に可能的世界」を「構成」することもしないことも「自由」とであるとされている。これは「内的知覚」を「反省」する立場で成り立つことである。

ところでこの「自由」は選択意志の自由である。我が為す選択の自由である。しかし西田はかかる「自由の底」を考える。そうしてそこに「我が我を離れ、意志が意志自身を失い、可能即現実として現われる」「直観の世界」を見る。先に「實在界」は「内的知覚」によって（おいて）与えられると言ったが、その「底」において「真に与えられるもの」は「動静一如の立場に於いて与えられる直観の世界」である。そうしてここから逆に経験界（實在界）が組織されるのである。この「直観の世界」は主客の同一でありながら同時に「主客の対立」を内に含んだものである。この対立故に「我々は先ず内に無限に自由なる自己を見、外に独立にして、それ自身によって動く物を見る」のである。この「無限に自由なる自己」はすでに選択意志の自由に落ちている。それは「動静一如の自己の立場から見れば、（自己と物の）孰れも自己の中に映されたる自己の影に過ぎない」とあることから明らかである。

こうして外に物を見た時に「時」の内容にしたがって「物理的世界」「精神現象の世界」を両極とした種々の世界を見るのである。しかし「理念が理念自身に返り、理念自身が自覚した時」、「時」は「實在を見る形式ではなく、働く創造の形式となる」。こうして「我は自由に種々の世界に出入する」と考えることができるのである。こうした思想と表現はすでに『自覚に於ける直観と反省』の「跋 (2, 344)」に見られた。

ところでこの「自由」は反省の立場での選択意志の自由ではない。直観の自由である。この点は『善の研究』でも次のように言われていた。

選択的意志と言うが如きはむしろ不完全なる我々の意識状態に伴うべきものであって、これを以て神に擬するものではない。例えば我々が十分に熟達した事柄においては少しも選択的意志を入れるの余地がない、選択的意志は疑惑、矛盾、衝突の場合に必要となるのである。勿論誰も言う如く知るといふ中には既に自由ということを含んで居る、知は即ち可能を意味しているのである。しかしその可能とは必ずしも不定的可能の意味でなければならぬことはない。知とは反省の場合にのみ言うべきではない、直覚も知である。直覚の方が寧ろ真の知である。知が完全となればなるほど返って不定的可能はなくなるのである。（新文庫版 頁）

『善の研究』において西田はイリングウォルスが『人および神の人格』において「人格の要素」として「自覚」「意志の自由」「愛」を挙げたことに因んで、人間の人格と神の人格をこの三つの要素に即して類比的に論じている。この内「物理現象の背後にあるもの」に関係するのは「自覚」と「意志の自由」である。

西田は反省によって起る自覚と、「意志活動の上にあって知的反省の上でない」「真の自覚」を区別する。「真の自覚」においては「全てが自己であって自己のほかに物なきが故に自己の意識はない」とされる。

また「意志の自由」についても疑惑、矛盾、衝突といった「不完全なる我々の意識状態に伴う」選択的意志と、「自己の内面的性質より働くという所謂必然的自由」とを区別する。選択的意志の自由の場合は反省によって不定的可能という意味での自由があるが、真の自由の場合には、反省ではなく直観によって不定的可能がなくなり、必然的となるというのである。この自由は直観による「自知」「自覚」に基づいている。そうして「神は人格であるというも直ちにこれを我々の主観的精神と同一と見ることはできぬ、寧ろ主客の分離なく物我の差別なき純粹経験の状態に比すべきものである」とされる。

このように『善の研究』においても直観に基づく自覚は純粹経験の根本を成している。「純粹経験の立場」が直観に基づく自覚によって成立しているということである。しかしそれは個々の知的直観において目的が実現されることを通じて自覚されるのとは根本的に異なっている。それは「純粹経験」そのものの自覚として「宗教的覚悟」によって成立するのである。純粹経験における宗教的覚悟の意義を西田はその後深めて行ったのである。